

## マレーシアに問い、マレーシアから学ぶ ——越境と相互参照の時代の民族・宗教——

西芳実

「マレーシアらしさとは何か」という問いは、「マレーシアから何を学ぶのか」という問いとともに、マレーシア研究に携わる者に常につきまとう問いである。第22回マレーシア学会研究大会シンポジウム「比較のなかのマレーシア：民族と宗教に関する国家・地域間比較への展望」は、タイ、インドネシア、中東とマレーシアに共通に見られる現象に注目し、マレーシアを外側から眺めることによってマレーシアの特徴を明らかにすることを試みた意欲的な企画となった。民族と宗教に関わる面に焦点を絞り、鈴木絢女会員と富沢寿勇会員という政治学と文化人類学をそれぞれ専門とする討論者を迎えたことにより、国境を越えた人・モノ・金の移動や相互参照を踏まえた地位向上の動きが盛んになっている現代世界において、政治と文化の問題が交錯する民族や宗教を国単位で捉えて比較・検討する際の課題と展望も明らかにされたように思う。

前半では、マレーシアとそれ以外の地域に見られる「バジャウ人」や「プラナカン」といった民族性や文化集団性に注目した報告が行われた。

長津一史「民族生成をめぐる国家と地域の文脈：マレーシアとインドネシアのバジャウ人」では、インドネシア・東ジャワ州サプカン島のバジャウ人とマレーシア・サバ州のバジャウ人の事例の比較が試みられた。ジャワ島、ボルネオ島、スラウェシ島、フローレス諸島に囲まれ、東インドネシア海域の交易拠点として発展してきたサプカン島は、ジャワ人とマドゥラ人を多数派とする東ジャワ州にあってサマ語が共通語となっており、血統によらずサマ語を基盤とするバジャウ人意識が住民の間に見られる。また、インドネシアの他地域のバジャウ人と連帯して海民

としてのバジャウ文化を称揚することにより地位向上をはかる動きがみられる。これに対してマレーシア・サバ州ではバジャウ人はマレー語を話すブミプラでありマレーシア国民の一部として地位向上をはかる動きが主流であって、隣接するフィリピンやインドネシアのバジャウ人との連帯によりマレーシア国内での地位向上を求める動きは見られない。

片岡樹「南タイのババ文化復興運動にみる『マレーシア性』」は、タイ南部のプーケットにおけるババ文化復興運動がタイでは馴染みのない「プラナカン」という呼称を掲げ、マラッカ、ペナン、シンガポールにおけるババ・プラナカンとの結び付きを強調する形で行われていることに注目し、その意味を検討した。19世紀のプーケットの興隆は海峡植民地だったペナンから移住した福建系華人によって支えられていたという歴史が再評価され、2003年以降はマレーシアやシンガポールで開催されていた国際ババ・プラナカン会議にプーケット代表が参加するようになり、2006年にはプーケットにプラナカン協会が設立された。

マレーシアとの比較において両報告が共通して強調していたのは、文化的少数者であるバジャウやプラナカン(ババ)が地域を越えた連帯や系譜を掲げることが国家や地域の主流派への政治的挑戦となっていない点である。このことと関連して興味深いのは、インドネシアやタイの事例ではバジャウ性やプラナカン性の提示が首都を介在させることなく地域独自の観光資源を開発する動きと一体となって進められている点である。ここでは、民族性を掲げて見せる相手の範囲は一国の枠内に限定されていない。

前半の報告に対する総合討論では、それぞれの報告が言語文化的な集団性に注目する民族観と社会政治的権益を確保するための集団性に注目する民族観のどちらを念頭に置いているのか、あるいはそのどれでもないのかという点に議論が集中した。この問いは、両報告が示したタイやインドネシアの事例が従来のマレーシアにおける民族理解の延長上で理解できるものなのか、それとも新たな民族理解が求められていることを意味しているのかを見定めようとするものでもあり、今後のさらなる議論が期待される。

後半では、インドネシアにおけるイスラムの組織化とマレーシアにおけるイスラム金融の現状が紹介された。

見市建「マレーシアとインドネシアはなぜこんなに違うのか：イスラームの組織化から考える」では、マレーシアではイスラム政党の動向が国政で一定の影響力を有するのに対し、インドネシアではそれが見られないことを始まりの問いとして、インドネシアのイスラムの特徴を紹介した。インドネシアではイスラム主義を掲げた政党が国家との交渉や権益を調整する窓口としての役割を失いつつある一方で、消費や文化の面でイスラム化が進行している。人々がイスラムに触れる機会は増しており、過激なイスラム主義も一定の支持を受けているが、それらは組織化に直接結びつくものではなく、イスラム表象が嗜好の対象として個々人に消費されている側面が示された。

福島康博「中東からみたマレーシア：イスラーム金融の事例から」では、マレーシアにおけるイスラム金融制度の理念と実態が紹介された。マレーシアではマハティール政権下で 1980 年代にイスラム金融制度の導入が進められた。世界各国のイスラム金融制度との共通化とマレーシア国内の従来型金融制度との並存が図られており、マレーシア国内

のイスラム教徒に対するサービスの提供という側面と国外のイスラム金融市場との接合という側面を両立させている。福島康博の報告によれば、マレーシアのイスラム金融制度はイスラム教徒個人個人の信仰心と経済生活の両面の充足という課題に応えようとする点に特徴がある。

両報告に共通するのは、個人としてのイスラム教徒の消費行動や投資行動が活性化しており、これらイスラム教徒の多様なニーズに応える動きが文化・社会の領域で無視できない規模に拡大している点である。ただし、インドネシアではこれらの動きが国家や制度と切り離して観察され論じられるのに対して、マレーシアではこれらの動きに政府が制度的に対応する様を見ることができる。

本シンポジウムでは、マレーシアを問う観点から紹介されたマレーシア以外の地域の事例がいずれも民族や宗教が政府に対する挑戦や交渉の窓口として機能していない事例だった。このことは、マレーシアにおける民族や宗教が政府に対する交渉の窓口として機能しているとの理解が広く共有されていることを意味する。同時に、マレーシアを問うために民族や宗教をめぐる越境的な現象に注目した結果、民族や宗教が消費や嗜好を支える一種の文化アイテムとして機能している側面も見えてきた。そこでは、首都を経由することなく、また、国の資源の分配を求めることなく、民族や宗教が持つ商品価値が開発され続けている。タイやインドネシアで観察されるこれらの動きが政治的軋轢を伴っていないとするならば、その背景を探ることがタイやインドネシアという場の特徴を明らかにすることになり、同時に、マレーシアという場の特徴を示すことにもなるのではないだろうか。